いなほ

令和５年１１月２８日
令和５年度学校だより NO.32②
加古川市立平荘小学校

第２３回平荘小学校狂言発表会≪NO.２≫
子どもたちは、演じ切りました！

第２３回平荘小学校狂言発表会が、始まりました。子どもたちの演目は、『附子』『柿山伏』『猿唄』の順に行いました。
『附子』の演目の途中に、アクシデントが発生しました！『附子』を入れている葛桶の蓋が取れないのです！

約５００人という観客の視線が集まる中、太郎冠者（役）は必至で蓋を取ろうとします。そして、次郎冠者（役）は、「向こうから吹く風に当たってさえ、滅却（めっきゃく：消え滅びること）する大の毒（附子のこと）」を、太郎冠者に浴びせてはならぬと、必死で仰ぎます。しかし、蓋は取れません。

２人にとって、そして、６年生のクラスメイトにとって、山口先生にとって、教職員を含む全ての観客にとって、長い時間が流れました。

太郎冠者の素晴らしい判断！そして、太郎冠者と次郎冠者の阿吽の呼吸！２人は、劇を止めることなく、次の演者にバトンをつなぎました！

２人は、よく休み時間に自主稽古をしていました。業間休みも、昼休みも・・・。
演技後、「ふだん稽古していたこと（『附子』の入れ物の蓋を取ること）ができなかったことが悔しい。失敗してしまった。」と言いました。失敗ではありません！見事な演技でした。

クラスメイトも息をのんで見守りました。そして、応援しました。

山口先生からは、「大正解！咄嗟の判断ができています。」の声をいただきました。

目の前に無いものでもあるように伝える（表現する）のが、お芝居です。『柿山伏』では、大きな柿の木が実際は目の前にはありませんが、目の前にあるように表現しました。畑主の目線や、山伏が高―い木の空から飛ぼうとする場面等。『附子』は、葛桶を用いていましたが、アクシデントが発生した本番では、『柿山伏』同様、蓋を取ったものとして演技をつないでくれました。演じ切りました！素晴らしいです。素晴らしい機転です！

地域からは、「演じ切りましたね。素晴らしいです。」と。

最初の場面が、『附子』の後々の演技に影響を与えます。精一杯演技ができました。

太郎冠者と次郎冠者は、主人から「向こうから吹く風に当たってさえ滅却するほどの大の毒」だと言われて『附子』の番をすることになるのですが、太郎冠者が「あの附子を見ようと思う・・。」と提案し、話が展開していきます。恐る恐る『附子』の正体を確認しようとしている太郎冠者や次郎冠者の様子を上手に表現しました。怖がりだけれども見てみたい二人の様子を「そりゃ退け、そりゃ退け。」「イヤこれこれ。」等、セリフと動きで観客に伝えました。

太郎冠者が『附子』を食べる場面では、次郎冠者が真剣に心配をしている状況をセリフや動きで表現したり、『附子』が砂糖だとわかった後の『附子』の取り合いを顔の表情や動きで表現したりする場面等、狂言のおもしろさを観客に精一杯伝えました。この日のために、子どもたちは、学校でも家でもたくさん稽古を積んできました。

そして、観客から笑いが起こったのは、笑いの場面の演じ手が頑張っただけではありません。今までの場面を演じてくれた仲間が、一つ一つ丁寧に自分の役割を果たしてくれたからこそ、大きな笑いが起こったのです。